興津における近代の別荘の形成とその背景

DEVELOPMENT PROCESS AND THE BACKGROUND OF VILLAS OF MODERN AGES IN OKITSU

土屋 和 男*

Kazuo TSUCHIYA

Okitsu was a place suitable for retreat villa area between the end of the 19th century and the second world war. Famous person's villa was built in Okitsu, and an excellent villa area was formed. Okitsu was located in the far from Tokyo in the beach villa area formed along Toukaido Line. There were not a lot of numbers of villas in the small scale. Therefore, owners had a personal connection. In this text, the villa made in Okitsu is researched. The historical background of Okitsu and the connection of owners are clarified. This is connected with knowing what place was ideal for famous persons.

Keywords: *Okitsu, Villa and Cottage, Modern Japanese Style, Scenic area, Place and Location*

興津, 別荘, 近代和風, 景勝地, 場所性

1. はじめに

静岡市清水区興津地区は、明治中期から昭和戦前期にかけて著名人の別荘が建てられ、良好な別荘地が形成されていた。興津は、近代において東海道線沿いに形成された海浜別荘地のなかでもっとも西に位置し、東京から遠い別荘地であった。小規模で別荘の数は多くはなかったが、その建築主には井上馨や西園寺公望をはじめとして、政治・経済上きわめて重要な人物たちがいた。建築主たちは特に老人の場合、隠棲や避寒を目的とし、小規模であるがゆえに互いに何らかの人間関係があるような間柄であった。

一般に、別荘造営にあたっては建築主個人が楽しみや保養を目的とし、自らすすんで場所を選び住宅の様式を決めるので、建築主の趣味が反映しやすい。とりわけ土地の限られた小規模な場所においては、建築主たちは同じ場所に対する指向を共有する者たちとして考えることができる。

本稿では、町史、伝記等の史料と現地におけるヒアリングに基づいて、興津においてつくられた別荘を概観するとともに、興津がどのような歴史的背景をもち、どのような建築主たちのつながりによって、別荘地が形成されていったのかを考察する。このことは、当時の要職にあった建築主たちが、自らの楽しみのためのすまいにどのような場所を理想としていたのかを知ることにつながり、それは

また、当時のすまいの理想型の一端を知ることにつながると考えられる。

近代の別荘地形成に関して、本稿と地域的に関連する研究としては、十代田朗氏、渡辺貴介氏、安島博幸氏らによる関東圏における別荘の立地とその類型に関する包括的な研究があり、一部興津に関しても触れられている¹⁾。小沢朝江氏、水沼淑子氏には東海道線沿いの皇族別荘を扱った研究がある²⁾。建築主たちの趣味や階層の点で関連する研究としては、矢ヶ崎善太郎氏による京都東山の別荘地形成に関する一連の研究があり³⁾、同地域を景観形成史的にとらえた出村嘉史氏、川崎雅史氏による研究もある⁴⁾。なお、筆者は興津における別荘地形成に関する研究として、これまで個々の事例について数度にわたって発表を行っている⁵⁾。

2. 別荘形成までの前史

2-1. 地勢と自然景観

興津において別荘地が形成されていた地区は、東西約3km、南北は海と山に挟まれた数百mの細長い地区である。ここを東海道と鉄道の東海道線が貫いている。

地区の周囲は、東側が薩埵峠でこの峠越しに富士山の山頂が眺められる。西側は江尻（現在の静岡市清水区の中心部）に向かって開

* 常葉学園大学造形学部造形学科 助教授・博士(学術)

Assoc. Prof., Faculty of Art and Design, Tokoha Gakuen University, Ph. D.

けているが、海岸線は南に向かって湾曲し、さらに三保地区が囲い込んで清水港を形成する。清水港は駿河湾の一部だが、興津地区の南側の景観は、港内の海越しに三保地区の砂嘴を望み、さらにその背景に広い駿河湾が広がるものとなる。三保地区の砂嘴に自生する松が三保の松原である。清水港内の興津地区の海岸は、昭和40年代に埠頭建設のために臨海が埋立られるまでは、浅い岩場で潮の干満によって岩が見え隠れし典型的な漏の景観を得られる場所として知られていた。これを清見漏（きよみがた）と呼んだ⁶⁾。さらに、南東の海上には伊豆の山々が連なる。富士山を前景となる山越しに背負い、海上には岩を配し、松原を浮かべ、遠く山々を連ねるという自然景観は、次に述べるように景勝地として知られることとなった。

北側は山が迫っており、このため冬季には柑橘類の栽培に適するような、きわめて温暖な気候が得られる。

2-2.前近代までの前史

(1)清見寺の存在

興津は東に峠を控え、海と山が非常に接近した地形で、東海道と、北に向かって興津川沿いに身延をとおり甲府に至る街道の結節点でもあり、古くから交通の要衝であった。古代には東国への関所として清見が関（きよみがせき）が開かれ、この関所に付属する寺として清見寺（せいけんじ）がつくられた。清見寺は戦国時代に今川氏の台頭とともに復活し、徳川家康が幼年期に預けられたり、豊臣秀吉が北条氏征伐のための拠点とし、秀吉に会いに千利休が訪れるなどしている。江戸時代には徳川幕府の庇護を受け、その知名度は強力なものとなる。興津は江戸時代には東海道五十三次の宿場となったが、朝鮮通信使、琉球使節の宿泊、休息には本陣ではなく清見寺が用いられた。清見寺は山の中腹に海を望んで建ち、その伽藍は自然景観との複合的景観としてよく知られていた。

(2)古典の名所

上述のような景観と史実から、興津は近代以前から伝統的に文学、絵画において景勝地として取り上げられてきた。和歌においては「きよみがせき、きよみがた」「たごのうら」⁷⁾の歌枕で詠まれた。歌枕となる名所として位置付けられると名所絵が作成され、また山水画の画題ともなった。なかでも、伝雪舟筆「富士三保清見寺図」は、興津の対岸の山（現在日本平と呼ばれている場所）からの景観に基づくもので、この構図は江戸時代に狩野派によって継承され、江戸城の障壁画にもなっていた記録がある⁸⁾。さらに、江戸時代には文人による紀行文⁹⁾や朝鮮通信使による漢詩¹⁰⁾などが残された。これらを通して浮世絵や名所図絵など、より広範な文学、絵画の題材ともなり、興津の景観は古典的な名所として巷間に流布していたのである。

2-3.近代における前史

(1)皇太子の海水浴場

近代以降、興津の場所を性格付けたのは皇太子¹¹⁾（後の大正天皇）の海水浴場としてであった¹²⁾。1889（明治22）年、東海道本線が開通し興津駅が開設された。その夏、皇太子は3週間に興津で過ごし、海水浴をしたと記録されている¹³⁾。皇太子は翌年にも同じように海水浴に訪れた。全国でも海水浴がはじまってからわずか数年のきわめて早い時期のことである。皇太子の滞在には清見寺が用いられた。

なお、清見寺は1869（明治2）年および1878（明治11）年の明治天皇御巡幸時の休息所ともなっており、鉄道開通までの間も前近代以来の特別な休息所としての役割を果たしていた。この蓄積の上に皇太子の行啓先が決められたと推測される。

明治中期以降の興津には皇太子のほかにも、皇后をはじめとした多数の皇族が保養を目的に行啓している。行啓先は清見寺が多かったが、後述するように井上邸や川崎邸などの別荘にも行啓している。

(2)水口屋の存在

東海道線の開通と皇太子の海水浴の前後から、海水楼、東海ホテルなどの宿泊施設がつくられ、これらには多くの著名人が泊まったとの記録がある¹⁴⁾。

最も古く、かつ重要な旅館は水口屋で、もともと江戸時代には脇本陣であったものが明治以降宿泊施設として経営された。1879（明治12）年、岩倉具視は水口屋が焼失した際に見舞を置いている¹⁵⁾。同年再建された水口屋はこれ以降、東海道を通行する貴頭たちの宿泊所となり、別荘地時代の建築主たちが興津を知るきっかけになったと推測される。水口屋が所蔵していた書だけでも、伊藤博文、山縣有朋らの揮毫になるものがある。さらに水口屋は勝間別荘という貸別荘も営んでいた。西園寺公望は別荘・坐漁荘を営む前にこの貸別荘に数度にわたり滞在し¹⁶⁾、坐漁荘の敷地も水口屋当主望月半十郎から取得したという¹⁷⁾。後述する阿部邸から検出した棟札にも「總世話方」として望月保太郎の名が見られる。これらから水口屋当主は別荘敷地等の斡旋を請け負い、興津における別荘形成に重要な役割を果たしていたとみられる。別荘ができると、水口屋は別荘へ料理を調達したり、客の宿泊所となった。

3.別荘の形成

3-1.著名人の別荘

興津につくられた別荘で、町史、伝記等の史料と現地におけるヒアリングや目視によって、立地や建設年が確認できるのは6件である¹⁸⁾（ほかに史料中にのみ記述があり場所が確認できないものが2件ある）。表1および図1に示す。現存する遺構はわずかで、著名人の別荘では旧阿部正桓邸が荒廃した状態で、旧大蔵和親邸が改装された状態で残る。以下、項目ごとに別荘地としての興津の形成を見る。

(1)建設年

興津における別荘は、1896（明治29）年頃¹⁹⁾に井上馨が、地区の西端、隣接する横砂地区と興津地区とにまたがって、広大な敷地を取得したことに始まっている。その後の著名人による別荘の造営は以下のように続く（（ ）内は当時の建築主の役職等）。

1896（明治29）年頃	井上馨邸（前内務大臣、伯爵）
1899（明治32）年	阿部正桓邸（元福山藩主、東京の大土地所有者（西片町）、伯爵）
1907（明治40）年	川崎正蔵邸（川崎造船創業者、男爵）
1910（明治43）年	大倉和親邸（日本陶器社長）
1918（大正7）年	伊藤博邦邸・独楽荘（宮内省式部長官、公爵）
1920（大正9）年	西園寺公望邸・坐漁荘（元総理大臣、侯爵、元老）

興津における別荘の建設年は、明治30年頃から大正前半期にかけてと、湘南、熱海、沼津等、他の東海道線沿いの海浜別荘地別荘地

と比べて短い。鉄道による移動で別荘建設が可能になってから比較的初期に形成され、その後の開発が進まなかった地域といえる。このことは地区の土地が限られていたこと、別荘の所有者に高位の役職に就く老人がいたこととも関係があるものと思われる。

(2)立地と敷地の様子

立地は2つのタイプに大別できる。すなわち、小高い山に位置し海と街を眼下に見るタイプと、海岸沿いに位置し海に隣接するタイプである。前者に属するのは、井上邸、阿部邸、伊藤邸であり、後者に属するのは川崎邸、大倉邸、西園寺邸である。

井上邸は「約5万坪」とか「約十七町歩」と伝えられ²⁰⁾、他と比べて広大で、波多打川の谷と両側の山全体がその敷地であり、斜面には果樹園が営まれていた。近代数寄者であった井上の趣味を反映して茶室や石塔が建ち、また山上には井上の巨大な銅像も立てられていた。住宅は川からやや上がった、海を望むことのできる場所に建っていた。

阿部邸は興津駅裏手の小高い山の山上にあり、南側の眺望景観が優れている。伊藤邸は農商務省農事試験場園芸部（現在の独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所カンキツ研究部）に隣接し、南東斜面の山の中腹に位置していた。東側には農事試験場の農園が眼下に広がり、北西の背後の山も農事試験場の柑橘畑である。一方からしか出入りができず、周囲は公的機関の土地である点、きわめて治安に配慮した敷地といつてよい。景観は清見瀧、三保の松原はもちろん、東側が開けているため山越しに富士山も望むことができ、眺望は絶好の場所である。

一方、川崎邸と大倉邸は隣地で、ともに6,000㎡程度²¹⁾の敷地であった。いずれも敷地は平坦で南側は小道を隔てるのみで海岸であった。西園寺邸は同じ海岸線の清見寺下に位置し、その敷地は1,200㎡程度²²⁾で、当時の貴顕の別荘としては狭さが目立つ。眼前には清見瀧の先に三保の松原が浮かび、遠くには伊豆半島を望む、明るく広い景観が開けていた。

(3)建築物の姿

住宅は、いずれも和風を基調と見なすことができるが、その具体的な姿は多様である。

井上邸の建物は、興津別荘造営以前に群馬県の磯部に所有していた別荘を移築して本館と呼び、麻布鳥居坂本邸で天覧歌舞伎の御座所となった建物を移築して別館と呼んでいた。本館は井上によって構想されたと伝えられる和洋折衷の2階建てで、写真と略図から推測すると、1階が和風、2階が洋風で、伝記によると両国橋の橋杭古材や鉋のかかっていない部材を柱として用いてあったという²³⁾。別館は平屋で、写真や伝記等から推測すると、もともと大きな和風住宅の最奥に位置する座敷部分と思われる。

阿部邸は和風平屋であるが、建具には板ガラスが用いられ、またコンクリートのべた基礎など、建設年に照らして当時においては先駆的な技術が見られる²⁴⁾。

川崎邸は1888（明治21）年につくられた旅館「海水楼」を取得、改築したものであった。正蔵の後、芳太郎の代となり、1917（大正6）年には全部を改築したと伝記『川崎芳太郎』は伝えるが²⁵⁾、この建物は建築家、山田醇の設計になるものと思われる。山田は川崎別荘の写真を作品として著書『住宅建築の実際』に掲げているが²⁶⁾、ここから一部2階建ての建物であることがわかる。山田醇は日本の住

宅作家の先駆的存在として知られているが、山田醇研究文献の年譜によれば、彼は独自の積算法により川崎芳太郎の知遇を得て、1917（大正6）年11月に神戸で独立し、川崎家の仕事を引き受けている²⁷⁾。この時期は伝記が伝える興津別荘の工事と合致しており、川崎家の興津別荘は山田の独立後まもなくの仕事の可能性が高い。伝統的な平面型よりも日射、通風等の環境的な条件が優先され、建築家の主張が反映された初期の個人住宅であった。

大倉邸の現存する部分は、和風平屋で玄関に対して左右対称に2室づつが並んでいる。座敷に達するには、両翼に囲われて玄関を入り、直角におれて次の間、さらに直角におれて座敷、もう一度直角におれて床の間の前と、奇妙な動線をたどる。これは普請道楽で知られる建築主の意向によるものと思われる。

伊藤邸は写真から判断すると、和風一部2階建てで、一部は斜面に張り出すように建てられていた。

西園寺邸は博物館明治村に移築されている²⁸⁾。建物は数寄屋造の2階建てで、設計監督者は則松幸十といい、この人物は住友本店臨時建築部に属していたといわれる²⁹⁾。主要な座敷は1、2階とも2間づつで、道路側からは建物は全貌が見えにくく、間取りは狭い部屋を意図的に複雑につなげ、サービス部分が多く取られている。これは老人が一人で暮らすということから、防犯と生活上の便利さを重視した結果と思われる。建物各所には竹が用いられ、主人の文人趣味を反映するとともに、海側には全面にガラス戸をとり、大きく開けた視界もまた、自然のなかで隠棲をするという主人の理想を映しているものと考えられる。

以上のように、興津に建てられた別荘は、和風を基調とすることは共通するが、主人の構想による和洋折衷のもの、べた基礎など実験的な技術を用いたもの、住宅を専門とする初期の建築家の設計によるもの、数寄屋造の端正な構えを見せるものなど、多様な姿を見せていた。これらは、別荘が本邸に比べ主人の好みや実験性が現れやすいこと、近代的な生活様式や材料が和風のなかで未消化で、類型化されていない時期に建てられていることなどが影響しているものと思われる。

(4)建築主

建築主には当時の貴顕が見られる。試みに造営当時の爵位を見ても、公爵1（伊藤）、侯爵1（西園寺）、伯爵2（井上、阿部）、男爵1（川崎）と多くの華族がいる³⁰⁾。彼らは複数の別荘を所有していることも多いが、小さな別荘地へのこの貴顕の集中は注目に値する。なかでも井上馨、川崎正蔵は近代数寄者として、西園寺公望は文人趣味をもつ人物として知られ、彼らの美意識に照らすと、別荘地選定にあたって、この場所が古典的名所であったことは大きな意味をもっていたものと推測される。また彼らは、かなりの高齢になってから興津に別荘を造営し、ここで晩年の多くを過ごした。これらの別荘は趣味人のリトリートとしての特徴をもっていたといえる。

3-2.別荘での出来事と人物のつながり

興津において、建築主たちは同じ場所に対する指向を共有する者たちとして考えることができる。別荘造営にあたっては建築主が自らすすんで好きな場所を選ぶが、その場所の選定にあたって、趣味を共有する友人や姻戚関係にある人物からの紹介や伝聞は、土地を知るきっかけや、具体的な土地の情報を得る信頼できる手段となる

表1 近代の興津における別荘

A 井上邸	1896	井上馨(62), 勝之助	元外務大臣, 農商務大臣, 内務大臣, 大蔵大臣, 伯爵, 元老
	(改築時)棟梁:塩津与三郎	本館:和風2階建, 施主の趣味が集積された建物, 別館:和風平屋	本館:磯部(群馬)の別荘を移築, 床柱は「阿国橋の橋杭」, 別館:麻布(東京)の本邸の一部を移築		
	横浜東町, 波多打川両岸の山を含む広大な土地「約5万坪」, 銅像, 石塔, 滝, 茶室等点在, 農園経営	皇后行啓(1907), 園遊会, 茶会多数	『袖師町誌』p.360/『興津地区年表』p.99/『世外井上公傳』/②
本館南側, 1階は和風, 2階(主要居室)は階高が高くやや洋風 (『庵原やすらぎ街道』p.9)	
B 阿部邸	1899 1922増築	阿部正恒(48), 正直 (増築時31)	元福山藩主, 東京の大土地所有者, 伯爵
	棟梁:塩津岩吉, 塩津与三郎	和風平屋, 旧大名華族の別荘遺構として稀少, 装飾は少ない	ベタ基礎, ガラス建具は非常に早い時期と思われる		
	興津本町, 小高い山(海拔40m程度)の頂部, 眺望良		①(実測, 棟札検出)
玄関付近現状, 著しく荒廃している 寄棟の書院造, 畳廊下, 縦羽目板	
C 川崎邸	1907取得, 改築 1917建替	川崎正蔵(70), 芳太郎 (建替時48)	川崎造船創業者, 男爵
	(建替時)設計:山田醇/ 棟梁:塩津与三郎	和風一部2階建, 住宅建築家山田醇の初期作品とみられる	(建替建物)東西に長い平面		
	興津本町, 東海道と海に挟まれた敷地(東西60m, 南北100m程度), 眼前は海	旅館「海水楼」(1888建設)を買収, 皇后行啓(1911), その後建替, 松方正義静養	『川崎芳太郎』p.191/ 『興津三十年誌』p.723/ 『住宅建築の実験』
南側, 入母屋庇付きの棟が見える, 庭には池がある (『興津町誌』p.16)	
D 大倉邸	1910取得 1918頃建替	大倉和親(36)	日本陶器社長, 東洋陶器社長, 日本碍子社長, 伊奈製陶会長
	(建替時)棟梁:塩津与三郎	和風平屋	寄棟, 4室が左右対称に並ぶ特異な平面		
	興津本町, 東海道と海に挟まれた敷地(東西100m, 南北60m程度), 眼前は海	大倉邸(本邸)についてブルーノ・タウトが言及	『興津町誌五』p.165/ 『大倉和親翁』
南側現状, 外壁は改変されている	
E 伊藤邸 (独楽荘)	1918	伊藤博邦(48), 博精	宮内省式部長官, 生活改善同盟会長, 公爵
	棟梁:塩津与三郎	和風一部2階建	一部斜面に張り出すように建てられていた		
	興津中町, 農商務省農事試験場内, 山の東側斜面, 富士山の眺望	戦時中皇室の子弟が疎開, 1950~農事試験場の寮, 清水市所有	『興津地区年表』p.88/ 『興津三十年誌』p.552
玄関, 寄棟の後ろに入母屋の2階が見える (『庵原やすらぎ街道』p.17)	
				農事試験場から見上げた外観 (『興津90年の歴史』)	

F 西園寺邸 (坐漁荘)	1920 1929増築	西園寺公望(71)	元総理大臣、ヴェルサイユ講和会議首席全権、侯爵、元老
	設計：則松幸十/棟梁：橋本源藏、塩津与三郎/作庭：小川治兵衛	和風2階建数寄屋、地味だが良質な材料で端正なデザイン、隠棲を表現する	狭いが複雑な平面、サービス部分が多い、面皮丸太の数寄屋
	興津清見寺町、東海道と海に挟まれた敷地(東西29m、南北40m程度)、眼前は海、塀、造園も一体のデザイン	重要人物の訪問多数(詳細な記録あり)、1951~記念財団が管理、1970博物館明治村に移築	『博物館明治村』p.178/『興津三十年誌』p.551/③
<div> <div>19 00 10 20 30 40 50 60 70 80</div> <div>T3.9 S4 S26 S45 移築</div> </div>			
中村邸(松の下庵)	1902	中村秋香	歌人、宮内省御歌所寄人
	興津中町	(資料なし)	『興津地区年表』p.78
	M35	不明	
<div> <div>19 00 10 20 30 40 50 60 70 80</div> <div>M35</div> </div>			
説田邸(梅別荘)	1913迄に建設	説田彦助	(資料なし)
	興津本町	(資料なし)	『興津町誌(五)』p.165
	T2まで	不明	
<div> <div>19 00 10 20 30 40 50 60 70 80</div> <div>T2まで</div> </div>			

凡例

名称	建設年等	建築主(建設時の年齢), 相続者	建築主の身分・主な役職
設計者, 施工者等	建築様式		建築に関する特徴
敷地に関する特徴		備考	資料
建設年と変遷	●建替, ◆増築, ★所有者変更を示す		

資料欄に掲げた文献

『興津町誌(五)』興津町誌編集委員会、1913
 田中明編『興津地区年表』興津公民館内清水市合併20周年記念実行委員会、1981
 袖師町誌編集委員会『袖師町誌』袖師町、1961
 『興津三十年誌』興津地区誌編集委員会、1992
 井上馨侯傳記編集會『世外井上公傳』原書房、1968
 岩崎虔『川崎芳太郎』岡部五峰、1921
 『大倉和親翁』大倉和親翁伝編集委員会、1959
 山田醇『住宅建築の実際』新光社、1932
 博物館明治村『博物館明治村』淡交社、1976
 および本文注5①-③の既往発表

場合が多い。別荘形成要因のいわば状況証拠として別荘での出来事と人物のつながりを検討する。

(1)別荘への行啓

前述のように興津は皇太子の海水浴場となって以降、皇族の行啓がたびたび行われた。行啓は従者や関係者が場所を知ることはもちろん、高貴な人物が保養に訪れる場所として興津の名声を伝える効果も大きかった。訪問先、滞在先は清見寺が多いが、個人の別荘でも数回行われている。井上邸には、1901(明治34)年2月に皇太子が3泊4日で滞在し、翌月にも訪れている³¹⁾。1907(明治40)年3月には皇后が沼津御用邸から訪れており³²⁾、このときに描かれた略図

北側、奥に向かって屋根が重なる、手前はサービス部分、奥が主人の居室、開口部がほとんど見えない(明治村の現状)
 南側、ガラスが多用された開放的な立面、手前はすぐに海であった、右は増築部の洋間応接室(明治村の現状)

図1 興津における別荘の位置

が、井上邸の平面を知る手がかりとなっている。また、1912(明治45)年4月には、皇太子がやはり沼津から再訪し、落語や相撲を楽しんでいる³³⁾。川崎邸にも、1911(明治44)年に皇后が沼津から行啓しており³⁴⁾、1917(大正6)年までに再度行啓があったという³⁵⁾。

(2)井上邸における茶会、園遊会

井上馨は世外と号し近代数寄者として知られている。井上邸では茶会や園遊会がたびたび開かれた。井上邸に招かれた高橋箒庵の記録によると、茶会では益田鈍翁らの数寄者仲間が集い、本館大広間で客を出迎え、その後本館の別室や別館に移り、ここで懷石の饗応を行い、庭園を巡って茶室魚躍庵で茶をふるまうという流れであっ

た³⁶⁾。園遊会では閣僚や貴族院議員、実業家らが招かれ、1914(大正4)年の園遊会では地元関係者を含めて招待者は約250名におよんだという³⁷⁾。広い邸内では余興が催され、庭園を散策したり各所を廻って建物内外を行き来した。催しが行われる時期はすべて晩秋から春にかけてで、この季節の交流の場を避寒地として別荘が提供していたことがわかる。興津における最初の別荘であった井上邸でこのような催しが行われたことは、この土地を喧伝する効果をもっていたと思われる。

(3)出身地等による人脈

興津の別荘所有者は多くが薩長の出身地や親戚としてプライベートなつながりを持っている。井上馨の養嗣子、井上勝之助と伊藤博文の養嗣子、伊藤博邦は実の兄弟で、実父は井上馨の兄である。彼らの出身地である長州の毛利家は西園寺家とともに関わりがあり、西園寺公望の養嗣子八郎は毛利家の出身である。伊藤邸・独楽荘の扁額は西園寺公望の揮毫によっており、西園寺邸・坐漁荘の訪問者名簿には伊藤博邦、井上勝之助の名がたびたび見られる。長州に対して薩摩出身者には川崎正蔵がおり、彼は同郷の松方正義と深い関わりをもっていた。松方は最晩年の1923(大正12)年に、川崎邸を静養に使っている³⁸⁾。伊藤邸に隣接する農事試験場の技師であった石原助熊は大久保利通の甥と伝えられる人物である³⁹⁾。大久保の次男の牧野伸顕は石原の従兄弟にあたるが、その西園寺との関わりはよく知られるところである。西園寺が1917(大正6)年に「水口や方」より牧野峰子に宛てた書簡の送付先は「相州湯河原大倉君別邸」⁴⁰⁾とある。この「大倉君」が、興津にも別荘を所有していた大倉和親である。西園寺の1916(大正5)年の桑名鉄城宛書簡では「相州湯河原大倉別荘」⁴¹⁾より差し出されており、自身も大倉の湯河原別荘を借りたことがわかる⁴²⁾。湯河原での貸借者同士が数年後興津での近所となったのである。

(4)人材供給源としての農商務省農事試験場

興津の別荘地形成における人材供給源として注目されるのは、1902(明治35)年に開場した農商務省農事試験場園芸部である。試験場の設立には井上馨の影響があったと伝えられ、初代場長恩田鐵彌は井上邸の農園管理も兼ねていた⁴³⁾。技師であった石原助熊は西園寺公望の避寒地選定に助言をしたといわれている⁴⁴⁾。石原は坐漁荘への訪問者名簿にもたびたび名前が見られ、後年日本女子大学の教授となるが、この大学は西園寺と深い関わりがある。井上邸の執事を務めた柿沼昇は当初農事試験場の見習生だったというが、恩田の薦めで井上邸に仕えるようになったという⁴⁵⁾。一方、西園寺邸の執事であった熊谷八十三は、第2代場長を勤めた後西園寺に仕えたが、これは伊藤博邦の推薦によるという⁴⁶⁾。柿沼のご子息によれば柿沼の長女と熊谷の息子は結婚し、したがって井上邸と西園寺邸の執事は姻戚関係にある。西園寺の竹杖は柿沼が謹呈したといわれている⁴⁷⁾。

4. まとめ

別荘地としての興津の特徴は以下のようにまとめられる。まず、別荘が形成された背景として次の点がある。

- 1)温暖の地であり避寒、隠棲に優れていた。
- 2)前近代から景勝地として歴史的、文化的に知られていた。
- 3)鉄道開通直後から皇太子の行啓をはじめ、著名人の来訪が相

次いだ。

興津には別荘地形成以前から古典的名所としての歴史があった。その風土と景観があらかじめ知られていたことが、著名人の来訪をうながし、都市から遠いにもかかわらず早い時期の海水浴場や別荘地の形成につながっていったと考えられる。その上で、形成された別荘の特徴としては次の点がある。

- 4)別荘地としては小規模で、街が拡大しなかった。
- 5)別荘はいずれも和風を基調とするが、敷地、建物とも、その規模や姿は建築主の意向を映し多様であった。
- 6)建築主は当時の貴顕で、その多くが交友や姻戚関係によってつながりをもっていた。

古典的風景のなかに身を置くことのできる場所として別荘地となった興津では、この景観を改変する動きはなく、別荘地は小規模なままであった。建築主たちの多くが吹米の生活様式をよく知る者でありながら、いずれも興津に和風住宅を建てたことは興味深い。別荘の立地、形態には、建築主の趣味と暮らしぶりが反映され、例えば広大な土地と農園を所有し園遊会や茶会を催した井上邸と、海岸に面して小さく隠棲の構えをとった西園寺邸は対照的であった。

当時の貴顕たちが別荘地として興津を選定した理由として、1)に加えて2)および3)は重要と思われる。地理的要因に加えて、歴史的要因は場所に蓄積された条件となり、これはいかなる土地とも代替不可能な条件となるからである。さらに、こうした場所に別荘をもつ者として、6)のように所有者同士は気心が知れており、そうした小さな街であるがゆえに、治安、情報の管理に優れていたといえる。すなわち、景勝地としての前史をもち、そのような場所に対する価値観を別荘の建築主たちが共有していたことが、興津における別荘形成の要点であったと考察できる。

謝辞

本稿執筆にあたり、情報提供、ヒアリングにご協力いただいた、渡辺康弘氏(静岡市文化財課)、柿沼守氏、塩津浩氏、阿部正道氏に記して謝意を表します。また、本稿は平成18年度科学研究費補助金(若手研究B:課題番号17760522)を受けた研究の一部である。

注

- 1) 十代田朗、渡辺貴介、安島博幸「戦前の関東圏における別荘の立地とその類型に関する研究」『日本建築学会計画系論文報告集』No.436, pp.79-86, 1992.6、安島博幸、十代田朗『日本別荘史ノート』住まいの図書館出版局、1991、十代田朗『関東圏における近代別荘地形成に関する史的研究』東京工業大学学位論文、1994等
- 2) 小沢朝江、水沼淑子「近代における皇族別荘の位置と沿革 御用邸など皇族別荘を中心とする海浜別荘の研究(1)」『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2分冊, pp.73-74, 2000、同「葉山における皇族別荘の建築実態と生活様式 近代における皇族邸宅の建築様式と生活様式に関する研究(2)」『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2分冊, pp.351-352, 2001等
- 3) 矢ヶ崎善太郎「近代京都の東山地域における別邸群の初期形成事情」『日本建築学会計画系論文集』No.507, pp.213-219, 1998.5、同「東山大茶会の会場となった建築・庭園の所在地と造営時期-東山大茶会に見る近代数寄空間の研究-」『日本建築学会計画系論文集』No.515, pp.243-250, 1999.1等
- 4) 出村嘉史、川崎雅史「浄土寺・鹿ヶ谷・若王子における近代以降の景域形成に関する研究」『土木学会論文集』779巻4-6号, pp.95-104, 2005等
- 5) ①「興津の地域環境形成に関する史的研究その1 阿部正桓別荘について」

- 『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2分冊、pp.373-374、1998、
- ②「別荘地・興津と井上馨の別荘 興津の地域環境形成に関する史的研究所の3」『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2分冊、pp.361-362、1999、
- ③「西園寺公望別荘・坐漁荘における建設の経緯と空間構成 興津の地域環境形成に関する史的研究所の4」『日本建築学会東海支部研究報告集』38号、pp.837-840、2000、④「近代和風住宅を通じた景勝地の形成に関する史的研究所」芝浦工業大学学位論文、2000。本稿は①②③および④の興津に関する部分を総合的に検証し直し、新たな知見を加えて書き下ろしたものである。
- 6) 戦後には、新幹線、東名高速道路、国道1号線バイパスがこの地区内を通り、それまでの景観は一変した。とりわけ、国道1号バイパスの高架橋は海上を通り、興津地区からはほとんど海が見えなくなってしまった。また、清水港の拡張ともなって海上に埠頭が建設され、清見潟は失われた。
- 7) 近代初期までの認識では、田子の浦は興津から吉原付近の海岸と考えられる。例えば貝原益軒の『東路記』（1684（貞享2）年）では「清見寺の客殿に雪舟の絵あり。清見寺の堂の前、絶景なり。興津、清見寺あたりの浜、清見潟也。興津と江尻の間に田子の浦有。」（板坂耀子校注『東路記、己巳紀行、西遊記』岩波書店、1991、p.12）とある。また、『東海道名所図絵』では、田子の浦は「都（すべ）で清見興津よりひがし浮島原迄の海邊の惣號なるべし」（櫻井庄吉『日本図絵全集：東海道名所図絵』下巻、日本随筆大成刊行会、1928、p.591（秋里離島「東海道名所図絵」復刻））とある。また、江戸城障壁画下絵の書込から、当時の絵師が興津の海を田子の浦とみなしていたことがわかる（注8参照）。
- 8) 東京国立博物館『江戸城障壁画の下絵』第一法規出版、p.17、1989、拙稿「伝雪舟筆『富士三保清見寺図』における富士山の表現にもとづく興津の場所性に関する考察」『常葉学園大学研究紀要・教育学部』26号、pp.173-185、2006
- 9) 長谷川成一『失われた景観 名所が語る江戸時代』吉川弘文館、1996、pp.13-22によれば、大淀三千風の本朝十二景（1690（元禄3）年）では、全国12カ所の景勝地のうち、田子の浦を第1位に挙げている。古川古松軒の『東遊雑記』（1788（天明8）年）でも「富士山・田子の浦、清見ヶ関、美穂ヶ崎」を第1位に挙げている。
- 10) 歴代の朝鮮通信使による記録の他に、『清見寺総合資料調査報告書：静岡県文化財調査報告書』49号、静岡県教育委員会、1997によれば清見寺には多数の史料が残されている。扁額と対聯は10点あり「桃源」「逍遙」「瓊瑤世界」「東海名区」と場所の美しさを褒め称えたものが目立つ。
- 11) 宮内庁『明治天皇紀』第七、吉川弘文館、1972、p.406によれば皇太子となるのは明治22年11月である。
- 12) 興津が皇太子の海水浴場として選ばれた経緯は不明である。1889（明治22）年発行の『興津海水浴場趣意書』によれば、興津の選定には東宮侍医、原田豊が関わっていたことがわかる。原田豊について前掲『明治天皇記』では1885（明治18）年に4等侍医となり（同書第六p.525）、「皇太子の拝診に専従」（同書第八p.433）とある。
- 13) 『興津町誌』下巻、興津町公民館、1950、p.161
- 14) 前掲『興津町誌』下巻、pp.160-164、田中明編『興津地区年表』興津公民館内清水市合併20周年記念実行委員会、1981、pp.54-98、『一碧楼水口屋展』清水港湾博物館、1995、pp.7-10
- 15) 前掲『一碧楼水口屋展』
- 16) 立命館大学西園寺公望伝編纂委員会『西園寺公望伝』別巻1、2、岩波書店、1997に掲載された書簡によると、西園寺は坐漁荘建設前の1916（大正5）年から1918（大正7）年にかけて4回にわたり滞在している。
- 17) 「坐漁荘秘聞」『季刊清水 特集坐漁荘』29号、戸田書店、1992、p.10
- 18) このほかに興津には、著名人の別荘ではないが、近代和風住宅を手がけた建築家の作品として山田醇の設計になる住宅2件が現存する。これについては、拙稿「興津における山田醇設計の住宅について（W氏邸 興津の地域環境形成に関する史的研究所の2-1）ならびに「同（A氏邸（旧五島別邸）同2-2）」『日本建築学会関東支部研究報告集』69号、pp.577-584、1999を参照。
- 19) 井上馨侯傳記編纂會『世外井上公傳』第5巻、原書房、1968（1933-34版の復刻）、p.606では、「二十九年の頃」、袖師町誌編纂委員会『袖師町誌』袖師町、1961、p.360では「明治29年1月」、北野葦『興津と元老』松永益発行、1966には明治28年に建設を始め、29年1月に竣工とある。また『世外井上公傳』には次の狂歌が紹介されている。「明治二十九年二月四日興津を出立して東京の家に歸りけるとき世塵を避くるため、人に逢わぬため、両

- 三日滞在して再び興津におもむきける 我家に歸るも人の目にかくれ戀にもあらで世をいとふ身は」（p.568）ここから井上馨が興津に別荘を造営したのは1895（明治28）年か96（同29）年と判断される。
- 20) 前掲『興津と元老』p.15および『東海道薩垂峠：東と西の会おう道』静岡国道工事事務所、1994、p.65。関係者の手元に当時の地籍図が残されており、その全部の範囲が井上邸の敷地だとすれば、現在の地図と比べてこれらの広さとはほぼ合致する。
- 21) 旧敷地の現状からの推測値による。
- 22) 跡地に立つ「坐漁荘址」の碑文によると1,255.96㎡とある。このほか史料によっていくつかの説がある。
- 23) 前掲『世外井上公傳』第5巻、p.591
- 24) 1998年3月に行った実測調査によって確認した。
- 25) 岩崎虔『川崎芳太郎』岡部五峰発行、1921、p.191
- 26) 山田醇『住宅建築の実際』新光社、1932、口絵。なお注18のとおり、山田はこの約20年後の円熟期に興津で住宅2件を手がけることになる。
- 27) 世田谷住宅史研究会（内田青蔵氏担当箇所）『世田谷の住居 その歴史とアメニティ調査研究報告書』世田谷区建築部、1991、p.114
- 28) 1970（昭和45）年6月に解体され、1971（昭和46）年3月に博物館明治村に移築された。跡地には2004（平成16）年に複製が建てられた。
- 29) 明治村蔵の棟札には次のように記されている。設計監督者 則松幸十、工事関係者 橋本源蔵、大工 塩津興三郎。塩津家には別の住宅の図面が所蔵され、そこに「則松」「日高」の印がある。「日高」は住友本店臨時建築部の日高胖とみられ、則松は日高の部下と考えられる。
- 30) 後には西園寺は公爵、井上は侯爵となる。
- 31) 『井上馨関係文書目録』国立国会図書館参考書誌部、1975、p.406
- 32) 前掲『世外井上公傳』第5巻、p.240
- 33) 前掲『世外井上公傳』第5巻、p.248、520
- 34) 山本實彦『川崎正蔵』吉松定志発行、1918、p.161
- 35) 前掲『川崎芳太郎』p.191
- 36) 高橋篤庵著、熊倉功夫・原田茂弘校注『東都茶会記』第2巻、淡交社、1989、p.157
- 37) 高橋義雄『萬象録』巻3、思文閣出版、1987、p.142
- 38) 前掲『興津町誌』下巻、p.16および前掲『興津と元老』p.54
- 39) 前掲『季刊清水 特集坐漁荘』29号、p.43
- 40) 前掲『西園寺公望伝』別巻1、p.254
- 41) 前掲『西園寺公望伝』別巻1、p.83
- 42) 湯河原町立図書館が調査した神奈川県公文書館の土地台帳によれば、湯河原の大倉の別荘は1910（明治43）年3月22日に登記されている。『大倉和親翁』大倉和親翁伝編集委員会、1959、p.287には、「大倉さんの別荘めぐり」と題して、興津、大倉の父孫兵衛の熱海の別荘、湯河原と巡る話が語られている。
- 43) 前掲『世外井上公傳』第5巻、p.610
- 44) 『西園寺公爵警備沿革史』静岡県警察部、1941、p.5によれば、注16の滞在前に、西園寺の秘書であった川村純蔵が、知人の石原助熊に相談し、石原が水口屋を薦めたとある。
- 45) 柿沼昇『井上侯と西園寺公の逸話』清水寿大学、1972、p.201
- 46) 前掲『興津と元老』p.130
- 47) 前掲『井上侯と西園寺公の逸話』p.159

（2006年10月4日原稿受理、2006年12月18日採用決定）